

# 『東海道中膝栗毛』に見られるオノマトペ

中 里 理 子

A Study on Onomatopoeia in Tokaidochu-Hizakurige

Michiko NAKAZATO

## 要 旨

『東海道中膝栗毛』のオノマトペを、地の文、ト書き、セリフに分けて特徴をまとめた。地の文は擬音語が多く、動物の声や楽器などの音が種類も数も豊富である。ト書きは擬態語が多く、中でも[情けない様子][うろたえる様子][密かな動作]を表わすオノマトペが多用され、主人公二人がいたずらを仕掛けては失敗したり狼狽したりする様子が印象的に描かれている。二人の動作は[緩やかな動作]より[勢いのいい動作][素早い動作]を表わす擬態語が多く、また、小言を表す擬態語が多いという特徴がある。ト書きの擬音語は、二人が旅先で騒ぎを起した際の物音が多い。セリフの擬音語は、笑い声以外の特徴として唾や嘔吐の音の多用が挙げられる。セリフの擬態語は、皮膚感覚を表わすオノマトペが多く見られた。全体に擬音語はその時々の一回性のものが多く臨場感を伴い、擬態語は人物描写を表す語が複数回用いられ人物のイメージの定着につながると考えられる。

## はじめに

近世のオノマトペを対象とした研究はそれほど多くはない。「楽器の音」に焦点を当て近世全体の特徴を考察した山口仲美(2017)、俳諧のオノマトペを対象とした田中巳榮子(2016)があるほか、個々の作品の特徴を見る論考として『東海道中膝栗毛』を調査した天沼寧(1977)や『浮世風呂』を調査した酒井知子(2019)等がある。筆者は近世のオノマトペを研究するにあたり、個々の作品の特徴について従来の研究よりも細かく整理し、さらに複数の作品の特徴を比較・整理することで、ジャンルごとのオノマトペの特徴を見出すことを目指している。

本稿では、滑稽本に見られるオノマトペの特徴を探る第一歩として、代表的作品の一つである『東海道中膝栗毛』を取り上げ、本作品に見られるオノマトペの特徴を細かく整理することを目的とする。従来の研究では、作品全体のオノマトペをまとめて取り扱っていたが、滑稽本は「地の文」「ト書き」「セリフ」で文体が異なるため、オノマトペの現れ方も異なると考えられる<sup>1)</sup>。そこで本稿では、「地の文」「ト書き」「セリフ」の三つの部分ごとにオノマトペの特徴を見ていく。また、従来の研究とは異なり、擬音語と擬態語の内容をさらに分類して、細かい特徴を見出していく。とくに擬音語の内容や人物描写のあり方を細かく整理することで、今後の研究において他作品との共通点や相違点を明らかにすることができ、さらに他のジャンルとの比較の際に役立つと考える。

オノマトペのうち擬態語の認定については、近世語も扱っている小野正弘編『日本語オノマトペ辞典』を参照した。また、同辞典に掲載されていない近世独特の語は、『古語大辞典』と『角川古語大辞典』の記述を参考に個別に判断した<sup>2)</sup>。

先に述べたように、『東海道中膝栗毛』のオノマトペを取り上げた論考に天沼寧(1977)がある。天

沼は表記に着目し、擬音語は「片仮名書きが圧倒的に多い」のに対し、擬態語は「平仮名書きにしてある場合が多い」と指摘している。さらに「笑い声・笑いの描写」「泣き声・泣きの描写」「その他の物音の描写」に分けて擬音語を整理し、「笑い声・笑いを表わす」語が「二十四種」ある中で、「男性の笑い声は、「ハハハ系」で、女性の笑いは「オホホ系」で、ほぼ統一されて」と指摘している。

本稿では、天沼が言及していない擬音語や擬態語を広く取り上げ、語の種類や用いられ方など、表記や音韻とは別の側面からオノマトペを整理し、作品に見られるオノマトペの特徴をまとめていく。また、先に述べたように、地の文、ト書き、セリフに分けてより詳しく特徴を見ていく。

調査対象としたのは、新編日本古典文学全集『東海道中膝栗毛』(小学館、中村幸彦校注)である<sup>3)</sup>。原文の繰り返し記号は便宜的に「/」と表わす。擬態語で1拍・2拍の語は、わかりやすく示すために「ふと」「ふつと」のように引用の「と」までを抜き出した。「ゆう/とこしうちかけて(三編下)」「夜もしん/とふけわたり(四編下)」「うなぎのほひ、ふん/とあがつた(八編上)」などは「悠々」「深々・森々」「芬々」という漢語由来の語であるため、本稿では扱わない。

## 1 『東海道中膝栗毛』に見られたオノマトペの数と内訳

今回の調査で抽出したオノマトペの延べ語数は1075語である。天沼寧(1977)では「擬音語・擬態語の総数は九〇〇足らずである」としているが、今回の調査では、天沼が除外している「きやつ」「ぎやつ」「ヒヤア」という悲鳴の擬音語や、「つくづく」「ふつと」などの擬態語も含めており、オノマトペの認定には差が生じている<sup>4)</sup>。また、複合的なオノマトペが多数あり、例えば、雷の様子を表わす「ごろ/びしや/」を一語とするか二語とするかで判断が分かれるところである。今回は、一続きで書かれたオノマトペは一語として扱ったが、「チャン/チキチ チャンチキチヤン」のように一字空けて示されたオノマトペは二語とした。また、「ちやらくらを言う」のような名詞形は取らないが、同形でも「ちやらくらといひちらし」のような副詞形は取った。「ここにこ顔」「ひげむしやくしやの大ぼうず」のように修飾語とみなすことのできる例は取った。

天沼寧(1977)の指摘にもあるように、作品全体に見られるオノマトペの多くを占めるのが、人の笑い声を表わす擬音語<sup>5)</sup>である。天沼は「271個に達する」としているが、本調査では277語を数えた。笑い声の特徴は、前節に述べたようにすでに天沼によって指摘されているため、本稿では笑い声については触れないこととする。

全体に擬態語よりも擬音儀が多い印象であるが、「地の文<sup>6)</sup>」「ト書き(割書)」「セリフ」によって、用いられるオノマトペの種類と数に違いがある。それぞれについて擬音語と擬態語の割合を見てみると以下ようになる。なお、笑い声はセリフに含めたため、セリフの語数が多くなっている。

[地の文] 異なり語数 77 延べ語数 99

擬音語 異なり語数 57 (74.0%) 延べ語数 74 (74.8%)

擬態語 異なり語数 20 (26.0%) 延べ語数 25 (25.2%)

[ト書き] 異なり語数 152 延べ語数 350

擬音語 異なり語数 60 (39.5%) 延べ語数 90 (25.7%)

擬態語 異なり語数 92 (60.5%) 延べ語数 260 (74.3%)

[セリフ] 異なり語数 172 延べ語数 563

擬音語 異なり語数 77 (44.8%) 延べ語数 363 (64.5%)

擬態語 異なり語数 95 (55.2%) 延べ語数 200 (35.5%)

擬音語の割合が最も高いのは地の文である。ト書きは人物の動作を説明する役割があるので、当然ながら擬態語の割合が高い。セリフは、擬音語の中に277語の笑い声が含まれるにも関わらず、延べ語数に占める擬音語の比率はそれほど高くはないことがわかる。次節以降、地の文、ト書き、セリフの部分に分けて、それぞれの特徴を具体的に見ていきたい。

## 2 地の文に見られるオノマトペの特徴

前節で見たように、地の文全体に見られるオノマトペの七割以上が擬音語である。地の文は擬音語を中心に特徴を見ていく。

地の文の擬音語は「動物」「人の音声」「楽器など（音を鳴らすもの）」「自然音」「その他の物音」に分類できる。以下に分類ごとにオノマトペを整理する。複数例ある場合は語の後に用例数を示した（以下同じ）。また〔その他の物音〕はオノマトペの後に括弧書きで内容を示した（以下の「その他」の項目も同様とする）。

### 〔動物〕 異なり語数13 延べ語数24

犬：あアん キヤアン<sup>2</sup> わん／＼<sup>2</sup> 鳥：あほよ／＼ カア／＼  
 狐：ケン引／＼ 鼠：チウ／＼／＼／＼  
 猫：ニヤアン 馬の尻：ブウ／＼／＼  
 馬：ヒイン／＼<sup>9</sup> ヒイン／＼／＼ ヒ、、、、 ヒ、ヒン／＼<sup>2</sup>

### 〔人の音声〕 異なり語数7 延べ語数8

赤ん坊：おぎやア／＼／＼／＼  
 いびき：ゴウ／＼／＼ ゴウ／＼スウ／＼ムニヤ／＼／＼ ゴウ／＼／＼ムニヤ／＼  
 笑い声：どつと<sup>2</sup> どつ／＼ 関の声：ワアイ引

### 〔楽器など〕 異なり語数26 延べ語数31

三味線：チツテレトツテレ<sup>2</sup> チテチレ／＼チ、、、、トテチレ／＼ チツンシヤン  
 ツ、テン／＼／＼ ツテチレ／＼ トヲチテン／＼<sup>3</sup> ベこべこ  
 ベンベラ／＼ ベンベラ／＼チヤンラン／＼／＼／＼  
 太鼓：てれつく／＼すつてん／＼ てん／＼てれつくてん／＼  
 竹笛：ヒヤリ／＼  
 鉦：チヤアン チヤ、、、チヤン チヤン／＼<sup>2</sup> チヤン／＼／＼／＼  
 チヤン／＼チキチ チヤンチキチヤン  
 鈴：シヤン／＼ しやん／＼／＼ シヤン／＼／＼／＼  
 鐘の音：ゴラン／＼  
 りんの音：チイン／＼  
 拍子木：カツチ／＼<sup>2</sup> カツチ／＼／＼ カツチ／＼カチ、、、

### 〔自然音〕 異なり語数4 延べ語数4

雷：ごろ／＼／＼ ごろ／＼／＼／＼ ごろ／＼／＼ぴしや／＼／＼／＼  
 雨だれ：ぼたり／＼

### 〔その他の物音〕 異なり語数7 延べ語数7

カチリガサ／＼／＼／＼（吹矢が当たる） カチリガツタリ（吹矢が当たる） フ、、、、引（吹矢）  
 プツ／＼プ、、、、引（吹矢） コト／＼／＼／＼（鳥がつつく） トント、、、、トシ／＼（豆）

腐を切る) どんと(落とす)

擬音語の中で種類と数が多いのが「馬の嘶き」と「三味線の音」「鉦の音」である。馬の嘶きとともに、馬に付けた鈴の音(ここでは[楽器など]に分類)もさまざまに描写されているが、これらは町や農村に住む人々にとって日常で頻繁に聞こえる音ではなく、旅に出ている雰囲気をかき立てる効果がある。天沼寧(1977)では、「笑い声を表わす擬音語」に次いで多いのが「三味線やたたきがね、太鼓などの音を表わすとみられるものである」と指摘されているが、旅籠で三味線を伴奏にうたい騒ぐ様子が擬音語によって表わされている。また、鉦の音は往来で聞くことの多い音であり、旅先にいることを感じさせる。

地の文の擬音語は異なり語数と延べ語数に大きな差はなく、一回性のオノマトペが多いことがわかる。また、同じ対象がいくつもの擬音語で描写されている。[動物]では、馬の嘶きや犬の鳴き声は何種類かに描き分けられている。犬と例えば「わん／＼」というのは固定的なオノマトペであるが、「ああん」「キヤアン」などはその瞬間の鳴き声を写し取った臨場感のあるオノマトペである。馬の嘶きも、「ヒイン／＼」だけではなく、「ヒ、ゝゝゝゝ」「ヒ、ヒン／＼」などと描き分けられている。[楽器など]では、三味線の音色を表現する際に、本調子・二上りなどの調子や、細棹・太棹といった種類によって表し分けており、「チツテレトツテレ」「ツ、テン／＼／＼」「ベンベラ／＼」など9種類のオノマトペが見られる。他にも、鉦は6種類、拍子木は3種類、太鼓は2種類と、その時々聞こえて来る音をそのまま表わそうとしている。また、雷、吹矢を吹く様子など、同種のもの聞こえるままに何種類かのオノマトペで描写している。犬は「わん／＼」、馬は「ヒイン／＼」、いびきは「ゴウ／＼」のように固定的なオノマトペを用いると、新鮮さがなくなり単調なイメージになるが、犬が「ああん」と鳴き、馬が「ヒ、ゝゝゝゝ」といなき、いびきが「ゴウ／＼スウ／＼ムニヤ／＼」と聞こえるなど、一回性のオノマトペを多く用いることによって、その瞬間に聞こえた音を写し取った、変化に富んだ音を感じられ、より一層の臨場感が生まれる。擬音語を多く用いることによって、聴覚の面からもその場の雰囲気が生き生きと伝わってくる。

擬態語は異なり語数20・延べ語数25のうち、人の様子を表わす語が八割を占めており、異なり語数16語(延べ語数20語)である。以下に、「人の様子」を挙げる<sup>7)</sup>。

うか／＼4 うろ／＼ きよろ／＼ ころり さつ／＼ しほ／＼ ずっと  
ずんど そろ／＼ たら／＼ とろ／＼2 とんと にこ／＼ ばら／＼  
ぶらりしやらり べた／＼

以上の語のうち「うかうか」「うろうろ」「きよろきよろ」はすべて主人公二人の行動を表しており、次の例のように旅先で迷いながら歩き回る様子を表している。

- (1) いづれを旅籠やとも見へわかたず、とまるべき方もなくして、うか／＼とたどり行ほどに、あはや軒下の犬どもが、おきたちて吼かへれば、弥次郎兵へきよろ／＼として (五編下)

これらの語はト書きでも多用されており、二人の人物の特徴を表し得ている。次節では人物の描写につながる擬態語を中心に見ていく。

### 3 ト書きに見られるオノマトペの特徴

ト書き(割書)に見られたオノマトペは、異なり語数152、延べ語数350である。前節で見たように、延べ語数のうち擬音語は二割強だが、擬態語は七割五分近くを占めている。擬態語は異なり語数に対して延べ語数が多く、複数回用いられている語がいくつかあることがわかる。ト書きは浜田啓介(2012)の解説にあるように「発話を閉じた次に、小字で[ト]を記し、それに続けて行為の進行を二行に割書した小書(こがき)で記す」ものであるため、地の文とは対照的に人物の行為を表わす擬態語が多く用いられることになる。

まず擬音語から見ていく。擬音語を前節にならって分類すると以下ようになる。

[動物] 異なり語数2 延べ語数2

馬:ヒイン／＼ 犬:わん

[人の音声] 異なり語数17 延べ語数29

うなり声:ウン／＼ 悲鳴:きやつと5  
笑い声:くつ／＼2 けら／＼ どつと4 どつ／＼ フ／＼  
泣き声:おい／＼ わつと3 煙草を吹かす:すつぱ／＼  
嘔吐:ゲイ／＼ 唾を吐く:べつ／＼  
その他:すう／＼ どや／＼2 にちや／＼ ほつと2 ムニヤ／＼

[楽器など] 異なり語数5 延べ語数7

太鼓:てんから／＼ 鐘の音:ゴラン  
鉦:チヤン／＼ 鈴:しやん／＼2 しやん／＼／＼2

[その他の物音] 異なり語数36 延べ語数52

がたびし(椀家具) がたり(棚が外れる) かし／＼／＼(火打ち) がつたり2(落ちる・当る) カツチ／＼(杖) かつちり／＼(石を叩く) がつちり(硬いものを噛む) から／＼／＼(天井の鼠) ぐつぐつ(煮える) ぐはた／＼(下駄を踏み鳴らす) ぐはら／＼／＼(棚が落ちる) ぐわつたり(落ちる) こつつり2(頭を打つ2) ごろ／＼(芋をする) ざぶ／＼(川へ入る) シイ／＼／＼引(小便) シウ引(蒸発する音) シウ／＼(小便) シウ／＼／＼／＼(湯が流れる) しやア／＼／＼2(小便) どつさり8(落ちる3・ころぶ2・尻餅・座る・こける) トン(膝を叩く) とん／＼(足音) トン／＼／＼(戸を叩く) どんぶり2(川へ落とす・川に飛込む) ぼつち／＼(算盤) ぼつたくさ(物音) ぼら／＼2(銭を抛り出す2) ぴしや／＼2(頭を叩く2) ぴしや／＼／＼／＼(頭を叩く) ぴつしやり4(頭を叩く2・馬の尻を叩く・石が顔へ当たる) ぼたり／＼(落ちる) ぼつたり(蛤が落ちる) ポンと(穴から指を抜いた音) ミシリ／＼(床が鳴る) ミシ／＼ガラ／＼ストウン(床から落ちる)

地の文の擬音語と比べると、[動物の鳴き声]と[楽器など]がかなり少なくなり、[人の音声]や人の行為にまつわる[その他の物音]が多く見られる。[人の音声]は、笑い声や泣き声、悲鳴のほか、嘔吐や唾を吐く音などが特徴的だが、セリフで抽出したものと重なっているため、次節で考察を加える。[その他の物音]では、何か壊れる音、落ちる音、何かを叩く音が多い。これは、二人が旅先で騒ぎを起していることにつながっている。「がたり」「がつたり」「かつちり」「ぐはら／＼<sup>8)</sup>」「とん／＼」「どんぶり」「ぼたり」など、現代でも通じる擬音語であり、江戸後期には、すでにこれらが一般

的に用いられていることがわかる。次に挙げる例のように、擬音語を使って描写することで、その場の様子が音声を伴って伝わってくる。

- (2) トいふこえに、北八うろたへ(略)にげだすひやうしに、あしへたけのとげをたてゝ、ぼつたりこけると、竹すのこをふみぬき、下へどつさりおちるおと、ミシ／＼ガラ／＼ストウン(二編下)  
(3) ト北八がつむりをもみながら、ひやうしをとりてあたまをびしや／＼(四編下)

また、「シイ／＼／＼引」「シウ／＼」「しやア／＼／＼」といった放尿の音が多く見られるが、放尿という下品とも言える場面が多く描かれ、そこにオノマトペの効果音が用いられていることがわかる。[人の音声]に嘔吐や唾を吐く音が多く見られたように、放尿や嘔吐・唾などの場面を多く描いて卑俗な笑いを誘い、オノマトペを効果音として用いている。

次に擬態語を見ていく。擬態語は異なり語数 92、延べ語数 260 のうち、「人の様子」に関するものは異なり語数 82、延べ語数 248 であり、大多数を占めている。異なり語数に比べて延べ語数が多いことから、いくつかの語が複数例用いられていることがわかる。セリフにも[人の様子]を表すオノマトペが見られるため、双方の分析に共通して用いる分類項目を立てた。複数例見られる語を中心に[気の抜けた様子][情けない様子][うろたえる様子][密かな行動][勢いのいい動作][素早い動作・スムーズな動作][緩やかな動作・のんびりした様子][小さな動き][見る様子][話す様子][笑う様子][驚く様子][感情][その他]に分けて整理した<sup>9)</sup>。これらの描写は、主人公だけでなく登場する人物の描写が含まれているが、[その他]以外の多くのオノマトペが主人公二人の描写となっている。

[気の抜けた様子] 異なり語数 2 延べ語数 6

うか／＼ 3 うつかり 3

[情けない様子] 異なり語数 10 延べ語数 22

がた／＼ 5 ぐにやり 3 ぐんにやり しほ／＼ 2 すご／＼ 2 とぼ／＼  
ひよろ／＼ 2 まじ／＼ まじくじ<sup>10)</sup> 3 もじ／＼ 2

[うろたえる様子] 異なり語数 4 延べ語数 12

うろ／＼ 6 うろ／＼きよろ／＼ きよろ／＼ まご／＼ 4

[密かな行動] 異なり語数 4 延べ語数 40

こそ／＼ 6 そつと 23 そろ／＼ 8 ひそ／＼ 3

[勢いのいい動作] 異なり語数 3 延べ語数 36

ぐつと 26 ぐつ／＼ 2 ずつと 8

[素早い動作・スムーズな動作] 異なり語数 6 延べ語数 26

さつさと さつ／＼ 10 さら／＼ すつと 2 ちやつと 11 ついと

[緩やかな動作・のんびりした様子] 異なり語数 4 延べ語数 4

うそ／＼ のさ／＼ ぶら／＼ ぶらり／＼

[小さな動き] 異なり語数 3 延べ語数 14

ちよいと 11 ひよいと 2 ひよつくり

[見る様子] 異なり語数 6 延べ語数 9

じろ／＼ じろり 2 じろり／＼ ちらと 2 ちら／＼ 2 つく／＼

[話す様子] 異なり語数 5 延べ語数 12

たら／＼ 4 ちやらくら ぶつくさ／＼ ぶつ／＼ 5 べちやくちや  
 [笑う様子] 異なり語数 2 延べ語数 4  
 にこ／＼ 2 につこり 2  
 [驚く様子] 異なり語数 3 延べ語数 19  
 ぎよつと 3 はつと 5 びつくり 11  
 [感情] 異なり語数 5 延べ語数 5  
 くしや／＼ ぞく／＼ ぞつと そは／＼ むつと  
 [その他の動作・様子] 異なり語数 25 延べ語数 39  
 ゑちら／＼ (行く) ぐしやり (口に入れる) ぐるり (取巻く) さつぱり (息絶える) さ  
 らり 3 しやア／＼ 2 (平気な様 2) じつと (笑いを堪える) しつかり (包を抱える) し  
 やんと (立つ) すつかり (とした) すつくり (立つ) すつぼり 3 (かぶる 2・抜ける) す  
 や／＼ (一寝入り) でつくり 3 ぱち／＼ (目) ぼつたり 8 (落ちる 3・倒れる 2・こける・  
 行き当る・会う・消える) ふと (心付く) ふつと (目を覚ます) べつたり (尻餅) ぺろ  
 へ (食う) ぼつり／＼ (食う) むしやくしや (髭) むしや／＼ (髭) むづ／＼ (鼻)  
 わんぐり (かみつく)

地の文にも、人の動作を表わす擬態語に「うか／＼」「うろ／＼」「きよろ／＼」「しほ／＼」などが  
 見られたが、ト書きではより多くの種類が見られる。まず、[気の抜けた様子] [情けない様子] [うろ  
 たえる様子] の三項目を見てみると、3例(「しほしほ」「もじもじ」「うろろう」各1例) 以外はすべ  
 て主人公二人の動作を表している。いくつか例を挙げる。

- (4) 又弥次郎がうか／＼と、きぬけのしたるていに、もしやはしのうへから、どんぶりとやりはせま  
 いかと、こゝろのうちにゆだんせず、(八編下)
- (5) トがた／＼ふるへるひやうしに手がゆるみて、うへのたながぐはら／＼／＼。(五編上)
- (6) ふたりとも元気おちて、きぬけのしたるごとく、ぐにやりとなりて (八編下)
- (7) 弥次郎はらたてどもせんかたなく しほ／＼とこの所をたちいづるとて (五編追加)
- (8) わがふんどしが、ごぜのまくらもとから、しきみごしに、わがまくらもとまで、ながくなつてお  
 ちているゆへ、(略) さすがにおれがのだともいわれず、もじ／＼していると、(四編下)

例 (4) ~ (8) に見るように、旅先で失敗をして情けない姿の弥次郎兵衛と北八がさまざまなオノ  
 マトペを使って描写されている。次に挙げる [うろたえる様子] の例も情けない状況を表している。

- (9) 北八を見てきもをつぶし、目がねのうへからじろ／＼と見るに、きた八もうろ／＼といつかうに  
 がてんゆかず、まごつくうち (八編下)
- (10) 弥次郎はちやつとにげて、おのがねどころへはひこむ。きた八まご／＼して、かのむこにつか  
 まり (四編上)

例 (9) は、北八が酒屋から雪隠に入ったが、酒屋と裏の家と両方で使う雪隠であることを知らず、  
 入ったときは反対側の戸から出てしまったため、思いがけず裏の家に入ってしまったという状況で  
 ある。例 (10) は、宿屋で二人が隣の新婚の部屋を覗こうとして襖が倒れて見つかったという状況で

ある。いずれも、うっかり失敗してしまい、うろたえまごつく様子が描かれている。[気の抜けた様子] [情けない様子] [うろたえる様子] のオノマトペを多用することで、主人公二人が、旅先で失敗をして困ったりまごついたりする様子が印象づけられる。

次に特徴的なのが[密かな行動]である。[密かな行動]は異なり語数は少ないが延べ語数が多い。「ひそ／＼」は3例とも主人公以外の行為だが、それ以外は二人の行動を表わす例が多く、「こそ／＼」は6例中5例、「そつと」は23例中20例、「そろ／＼」は8例中7例が主人公二人の行動を描写している。いくつか例を挙げる。

- (11) きた八おもふさま、くつてしまい、すきまを見て、わんにもりたるめしを、一ぜんちやつと打あけ、てぬぐひに引つゝ、やがてこそ／＼とにげ出、(二編下)
- (12) 弥次郎、そつとおきあがり見れば、きた八はほんとうにねいりしよふす。してやつたりと、そる／＼はひかけ、ふすまをそつとあけて、となりざしきへはいり見れば、(四編下)
- (13) ちよくにいつぱいついでひと口のみ、下におくと、きた八そつと手を出し、ちよくのさけをのんでしまい、ちやつともとの所におく (三編下)

例(11)は、北八が大名の本陣に潜り込み、食事をした上に飯を一膳持って帰る場面、(12)は、弥次郎兵衛が北八を出し抜いて警女に夜這いを仕掛けようとする場面、(13)は座頭が猪口で飲んでい酒を北八が盗み飲むという場面である。作中では二人がさまざまないたづらを仕掛ける場面が多く描かれているが、こっそりといたづらを仕掛ける際の様子が「こそ／＼」「そつと」「そろ／＼」といったオノマトペを用いて描かれている。なお、波線で示したように、いたづらを仕掛ける際に素早く「ちやつと」隠すという例も多く見られ、すばやくいたづらを仕掛ける二人の動きが伝わってくる。

延べ語数の多い[勢いのいい動作]は、「ぐつと」が多用されている。「ぐつと」は擬態語の中で最も用例数が多い<sup>11)</sup>が、江戸時代後期において、勢いよく何かをする場合に一般的に用いられたオノマトペである<sup>12)</sup>。以下、いくつか例を挙げる。

- (14) ト髪の毛をもつていやといふほどぐつとひつたてる (五編追加)
- (15) ふたりともぜんごもしらず、はなつきあはせてぐつとねいる。(三編上)
- (16) 弥次ひといきにぐつとのんでちやわんをなげだし (六編上)
- (17) 内に十八九のむすめ(略)只ひとりゐるよふす、北八れいのわるじやれにて、ずつと此内へはいりて笑ひかけ (四編下)

「ぐつと」は例(14)のように力を込める様子だけでなく、(15)のように十分な様子や(16)のように一気に行う動作を表わす。なお、(14)は髪結いの動作だが、26例中17例は主人公二人の動作を表している。勢いのある動作江戸っ子らしい二人の特徴であろう。例(17)の「ずつと」は勢いよく出入りする擬態語で、北八がずうずうしく入って行く様子が現れている。「ずつと」は8例中7例が主人公二人の動作を表している。

[素早い動作・スムーズな動作]は「ちやつと」「さつさつ」の用例が多いが、主人公の動作を表わすのは、「ちやつと」は11例中9例、「さつさつ」は10例中3例、「さら／＼」1例、「すつと」2例の15例である。対照的な[緩やかな動作・のんびりした様子]は、総数も少ないが主人公二人の動作は「うそ／＼」「ぶらり／＼」の2例しかない。主人公二人の動作は、のんびりした動きより素早い動



[その他の物音] 異なり語数 11 延べ語数 13

カリ／＼／＼ (えびをかじる) ガリ／＼／＼ (胡椒) ガリ／＼／＼／＼ (葉) ぐはた／＼  
(下駄で踏み鳴らす) シウ／＼ (酒が流れる) シヤア／＼2 (放尿) ごろ／＼ぴかり (雷)  
しやん／＼／＼2 (手打ち 2) すつぼん (抜ける) ぴしや／＼ (雷) ふつつり (切れる音)

擬音語は「ヒヤア」という悲鳴が複数例ある以外は、ほとんどが一回性のオノマトペであることから、地の文やト書きと同様に、固定的なオノマトペを用いるのではなく、その時々を音を活写していることが見て取れる。また、ト書きにも見られたが、「ペツ／＼」「ペツ／＼／＼」「ペツペ／＼」という唾を吐く音や、「ゲエイ／＼」「ゲツ／＼」という嘔吐の音が多い。このような卑俗なオノマトペを多用しているのは、本作品の特徴の一つであろう。また、天沼寧 (1977) に「口三味線」とされている音が種類も数も多く見られる<sup>16</sup>。三味線の音は当時の人々にとって身近な音であり、本物の音色のように口まねをして、その時々を調子を奏でているのであろう。

セリフの擬態語は、異なり語数 95、延べ語数 200 である。ト書きと同様に人の様子を表わすものが多いが、主人公二人の様子を表わす以外のものが多い。また、「ひゆつとやりからかいて、これから門もつこうへもどろふまいか。(四編下)」のように、旅先で出会う旅人のセリフとして江戸語以外の方言と思われる語もある。それらも踏まえて、「人の様子」を表わす擬態語をまとめる。「人の様子」の擬態語は、異なり語数 62、延べ語数 123 である。ある程度の語数が得られる項目を整理した (語数が少ない項目は「その他」にまとめた)。

[情けない様子] 異なり語数 5 延べ語数 5

がっかり 愚都々々 すご／＼ ひよろ／＼ ひよろり／＼

[うろたえる様子] 異なり語数 3 延べ語数 5

うろ／＼ きよろ／＼3 まご／＼

[勢いのいい動作] 異なり語数 2 延べ語数 11

ぐつと 8 すつぱり 3

[素早い動作・スムーズな動作] 異なり語数 4 延べ語数 9

さつ／＼ ちやと 4 ちやつと 2 ちやつ／＼2

[緩やかな動作・のんびりした様子] 異なり語数 1 延べ語数 11

ゆるり 11

[話す様子] 異なり語数 4 延べ語数 6

じやら／＼・ぢやら／＼2 ちやらくら つべこべ つべらこべら

[驚く様子] 異なり語数 2 延べ語数 7

はつと 3 びつくり 3・恟り

[感情・感覚] 異なり語数 10 延べ語数 16

ざら／＼2 しく／＼ じく／＼ じみ／＼ ぞく／＼2 そは／＼ にちや／＼2  
につちやりくつちやり ぴり／＼4 むか／＼

[その他の動作・様子] 異なり語数 31 延べ語数 53

ぐい／＼ (喉を動かす様) くるり (目を明く) ごそ／＼ (様子) ころ／＼ (笑う) じたんばたん (苦しがる) じつと 3 (待つ・する 2) しつかり 5 (楽しむ・乗る・着る・取付く・頼む) しやア／＼ (居る) そつと 4 (向る・抜ける・出る・手を握る) そろ／＼3 (立たせ

る・かごを拾う・行く) たら／＼ (不都合) ちやんと (おぶさる) ちよいと (きめる)  
 ちよこ／＼ (誘われる) ちよつ／＼と (参る) ちらと (聞く) ちら／＼ (見える) つい  
 と2 (放っておく・出る) とつとと4 (出て行け4) にこ／＼ (微笑む) ひゆつと5 (出る・  
 違いない・飲む・丈夫・持って行く) ぴろ／＼ (する) ひんなり (とした) ふと (行く)  
 ふつと3 (手を付ける・話す・思い出す) ふうつウリ (愠気しない) ぼつとり (とした) ぼ  
 んぽこな (腹) むしやくしや2 (ひげ2) むしや／＼ (喰らう) ムニヤ／＼ (寝言)

[情けない様子][うろたえる様子]を表わす擬態語は地の文やト書きで多用されていたが、セリフでもある程度の数が見られる。これらのうち、主人公二人の様子を表わすのは「がっかり」「ひよろ／＼」「ひよろり／＼」「きよろ／＼(2例)」「まご／＼」で、地の文やト書きと併せて二人の人物描写の特徴となっている。

ト書きに多用された[密かな動作]は1例もなかったが、[勢いのいい動作][素早い動作・スムーズな動作]のオノマトペは何例も見られる。中でも「ぐつと」はト書きと同様に多用されており、当時の口語でよく使われた語であることがわかる。「ぐつと」7例、「すつぱり」1例、「さつ／＼」1例、「ちやつと」2例、「ちやつ／＼」1例が、主人公二人の動作を表している。なお、「ちやと」4例はすべて江戸を離れた旅先の人々のセリフで用いられていた。以下、いくつか例を挙げる。

- (18) 弥次「ドレふなべりへ、ぐつと顔を出してやらつし(六編上)  
 (19) 北八「結城のぐつといきな縞で、三まいばかり、羽織はりうものこり／＼するやつの、芥子あられなぞが、金持らしくて、よかろうじやアねへか(八編中)  
 (20) 北八「おめへのすてたものを、あとからちやつとひろつてきたから、コリヤアおいらにさづかつたのだ(八編上)

例(18)(19)に見るように、「ぐつと」は力を入れる動作、勢いのいい動作に加えて、セリフでは強調表現としても使われている。例(20)「ちやつと」は、ト書きでも9例が二人の動作として用いられている。これらのオノマトペで、戸っ子らしい威勢の良さや素早い動作が印象づけられる。

[緩やかな動作]の「ゆるり」は、11例中9例が「御ゆるりと(初編)」のように相手に向けた決まり文句として用いられるが、2例は「おいらは、ゆるりと爰で、支度して出かけやうさ(六編上)」のように二人が自分たちの行為に用いている。地の文と同様に[勢いのいい動作][素早い動作]のほうが多く用いられている。[話す様子]は「ちやら／＼」は3例とも弥次郎兵衛が冗談を言う様子を、「ちやらくら」は北八が嘘をつく様子を指しており、冗談好きな二人の性格を反映している。[驚く様子]は「はつと」2例、「びつくり」1例が主人公たちの様子だが、特段多いわけではない。

セリフで特徴的なのは、[感情・感覚]を表わすオノマトペが多いことである。主人公二人のセリフ中で用いられ二人の様子を表しているのは、「ざら／＼(1例)」「じく／＼」「ぞく／＼(2例)」「そは／＼」「ぴり／＼(4例)」「むか／＼」である。感情を表わす「そは／＼」以外はすべて感覚を表している。以下にいくつか例を挙げる。

- (21) 弥次「エ、どふりでざら／＼するとおもつた。ペツ／＼、(二遍下)  
 (22) 北八「どぶかくびすじがぞく／＼するよふだ(三編下)  
 (23) 弥次「けがはせぬが、まだ腹の中がぴり／＼する(五編上)

(24) 北八「とんだこつた。むねがむか／＼する (六編上)

例 (21) は糠をつけた団子を食べた食感、(22) は幽霊が出そうで背筋がぞっとする肌感覚、(23) は熱い蛤を食べてやけどしているような感覚、(24) は小便を捨てたはずの容器に入れた酒を飲み吐き気を催すような感覚を表している。これらの主人公以外のセリフでも「瘡と見へて、あたまから首筋のあたりまで、じく／＼ (六編上)」「酒でにちや／＼する (三編下)」など、負のイメージの触感がオノマトペで表現されている。このような触感を表わすオノマトペによって、感覚的に状況が伝わってくる。皮膚感覚や触感を表わすオノマトペが多くしかも負のイメージの感覚が多いのは、本作品の特徴の一つではないだろうか。

「人の様子」以外のその他の擬態語は、異なり語数 33、延べ語数 77 である<sup>17)</sup>。

## 5 まとめ

『東海道中膝栗毛』に見られたオノマトペを、地の文、ト書き、セリフに分けて整理し、その特徴を見た。

地の文は擬態語より擬音語が多い。特に動物の声と楽器などの音を表わすオノマトペは、種類も数も豊富である。馬の嘶きや馬に付けた鈴、鉦の音がさまざまに描写され、日常から離れて旅に出ている雰囲気が擬音語を通して伝わってくる。三味線の音色の描写も多様で、旅籠で三味線を伴奏に騒ぐ様子が臨場感を持って描かれている。擬態語は少ないが、その中でも主人公二人の動作や様子を表わすオノマトペが多く見られた。

ト書きは、その機能を考えると当然ではあるが、擬音語よりも擬態語が多用されている。まず擬音語を見ると、[動物の鳴き声] [楽器など] は少なく、人物の行動や様子に関するオノマトペが多い。

[人の音声] は笑い声や泣き声、悲鳴のほか、嘔吐や唾を吐く音などの汚い音が見られるのが特徴的で、[その他の物音] には放尿の音も多くみられる。また、[その他の物音] には、主人公二人が旅先で騒ぎを起した際の、何か壊れる音、落ちる音、何かを叩く音が多い。次に擬態語を見ると、[気の抜けた様子] [情けない様子] [うろたえる様子] と [密かな動作] を表わすオノマトペが多く見られ、主人公二人の人物描写に深く関わっていることが見て取れた。二人がいたずらを仕掛ける際の「こそ／＼」「そつと」「そろ／＼」の多用や、へまや失敗をした際などの「うか／＼」「うっかり」「ぐにやり」「すご／＼」「もじ／＼」「うろ／＼」「きよろ／＼」「まご／＼」などの多用により、無分別な二人が行く先々でいたずらを仕掛けては失敗を繰り返し、落ち着きがなくまごつきうろたえる様子が印象的に伝わってくる。二人の動作は [緩やかな動作・のんびりした様子] より [勢いのいい動作] [素早い動作・スムーズな動作] を表わすオノマトペが多く見られる。「ぐつと」「ずつと」「ちやつと」が多用され、江戸っ子らしい素早さや勢いの良さが伝わってくる。その他、「たら／＼」「ちやらくら」「ぶつくさ／＼」「ぶつ／＼」など、二人が小言を言う際のオノマトペが多く見られる。

セリフは笑い声が多いため擬音語が多くなっている。笑い声以外で特徴的な擬音語は、ト書きにもある「ペツ／＼」「ペツペ／＼」などの唾を吐く音や、「ゲエイ／＼」「ゲツ／＼」という嘔吐の音である。読み手も顔をしかめたくくなるような口中の気持ち悪さをよく表しており、ト書きで放尿の音が多かったことと併せて、卑俗な笑いの場面でオノマトペが多用されていることがわかる。口三味線の擬音語も多く見られるが、地の文に見られる本物の三味線の音色と同様に、その時々聞こえる音をオノマトペで表現し、その場の雰囲気を盛り上げている。擬態語は、主人公二人の様子が「がっかり」「ひよろ／＼」「ひよろり／＼」「きよろ／＼」「まご／＼」と表現されており、地の文やト書きと同様

に二人の人物描写と結びついている。また、「感情・感覚」を表わすオノマトペが多く、「ざら／＼」「じく／＼」「ぞく／＼」「びり／＼」「むか／＼」など、皮膚感覚、触覚を表わすオノマトペ、負のイメージの語が多く見られた。

全体を通して、擬音語は固定的なものではなく一回性のものが多く、その場の雰囲気伝える描写となっている。擬態語は複数回用いられる語が多数見られたが、特に主人公二人の人物描写に関わる語が複数回用いられており、二人のイメージの定着につながっていると考えられる。

## おわりに

以上述べたように、『東海道中膝栗毛』に見られるオノマトペの特徴を、地の文、ト書き、セリフに分けてまとめた。従来の研究に加えて、笑い声以外の擬音語の特徴を詳しく整理したこと、人物描写に多用されたオノマトペを整理したことが研究の成果である。

今後は、式亭三馬など他の滑稽本について調査し、作品ごとのオノマトペの特徴をまとめるとともに、滑稽本全体のオノマトペの使い方についてまとめていきたい。滑稽本のオノマトペについて考察することで、近世のオノマトペ全体について考える一資料とすることを目指している。

## 【注】

- 1 拙稿(2020)「近松門左衛門の時代浄瑠璃に見られるオノマトペの特徴—世話浄瑠璃との比較を交えて—」『佐賀大学教育学部研究論文集』第4集第1号から拙稿(2022)「河竹黙阿弥作品のオノマトペ—幕末の歌舞伎脚本を対象に—」『佐賀大学教育学部研究論文集』第6集第2号までの調査により、浄瑠璃と歌舞伎脚本では、浄瑠璃部分、ト書き、セリフでは、それぞれオノマトペの特徴が異なることが認められた。滑稽本においても、地の文、ト書き、セリフによって用いられるオノマトペに違いがあるかどうかを考えていきたい。
- 2 『日本語オノマトペ辞典』は近世語のオノマトペが多数掲載されており、抽出した擬態語は、六語(ぐい／＼、たら／＼、ちやと、とつと、とんと、ふうつうり)以外は同辞典に記載がある。なお「ぶらりしやらり」のような複合語は「ぶらり」「しやらり」の二語に分けて判定した。同辞典に記載のない六語は個別に判断した。「ぐい／＼」は、「さけといふと、一ばんに咽をぐい／＼する」と用いられており、喉を動かす様子のオノマトペと判断した。「たら／＼」は『角川古語大辞典』に「たらだら」が立項されており、『たらたら(と)』もしくは『だらだら(と)』から転じた語とある。「たらたら」「だらだら」と同様に「たらだら」も擬態語と判断した。「ちやと」は『角川古語大辞典』に『ちやつと』と同じと書かれており、『日本語オノマトペ辞典』に認定されている「ちやつと(同辞典では「ちゃつと)と同じく擬態語と認定できる。「とつと」は『古語大辞典』に「はなはだしいことを表す擬態語から」と記述され「①程度のはなはだしいさま。非常に。全く。すっかり。」とあり、本稿でも擬態語と判断した。「とんと」は、『角川古語大辞典』に「①擬態語。事のなされるのがすばやいさま。急にすっかりそうなるさま。」とあり「②転じて、事や状態が徹底しているさま。すっかり。まったく。」とある。②の意味は擬態語から転じているが、意味上は「とつと」と同じであり、もとは擬態語であることから、音象徴性が感じられる語として、ここでは二語とも擬態語(オノマトペ)と判断した。二語のオノマトペ認定の可否については今後の課題としたい。「ふうつうり」は「ふつうり」の語形が会話で変化した語として擬態語とみなした。
- 3 中村幸彦氏によると、定本は平戸市松浦史料博物館所蔵本及び校注者の蔵本を使用したという。なお、天沼寧(1977)は岩波文庫本(麻生磯次校注)を対象としているので、表記等で若干の違いが



- 16 天沼寧（1977）は、「三味線などの鳴物を実際に使用している場合の描写か、あるいは、口三味線やはやしなどの合いの手の描写かが、はっきり判別し難い場合もある」と指摘しているが、本稿でも文脈に応じて擬音語として数えている。
- 17 その他の擬態語は、「うんと、ぎり／＼、こり／＼、ざつと4、さつぱり3、しやつきり、しよぼ／＼、たつぷり2、たんと7、ちんと3、つつと、てんつるてん、てうど2、てつきり、とつと10、とんと13、どんぶりすつこつこ、はつきり、ぱり／＼、ぴち／＼、びつく、ひよいと3、ひよつと4、ぶうらり／＼、フカ／＼フツ、カ、ぶは／＼、べつたり2、ホカ／＼、ぼつきり、ぼつぽ2、めつきり、めり／＼、わつきり2」である。

【引用・参考文献】

天沼 寧（1977）『東海道中膝栗毛』に使われている擬音語・擬態語について『近代語研究』第5集、武蔵野書院

興津 要（1965）「滑稽本 東海道中膝栗毛（十返舎一九）」『国文学解釈と鑑賞』5月号（至文堂）

小野正弘（2007）『日本語オノマトペ辞典』小学館

小野 望（1985）「東海道中膝栗毛の方言描写」『文献探究』16号

酒井知子（2019）『浮世風呂』のオノマトペについて『立教大学日本文学』121号

田中巳榮子（2016）「近世初期俳諧における音象徴語」『國文学』100号（関西大学）

中田祝夫監修（1983）『古語大辞典』小学館

中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（1994）『角川古語大辞典 第四巻』角川書店

浜田啓介（2012）『道中膝栗毛』の進行記述形式の成立について『近世文藝』95号

飛田良文編（2006）『国語論究12 江戸語研究—式亭三馬と十返舎一九—』明治書院

山口仲美（2017）「楽器の音を写す擬音語（2）—近世・近現代」『埼玉大学紀要 教養学部』53巻1号

山口仲美編（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社

付記:本稿は科学研究費基盤研究(C)(一般)「近世の滑稽本・談義本に見られるオノマトペの記述的研究」(課題番号:22K00589)の研究成果の一部である。